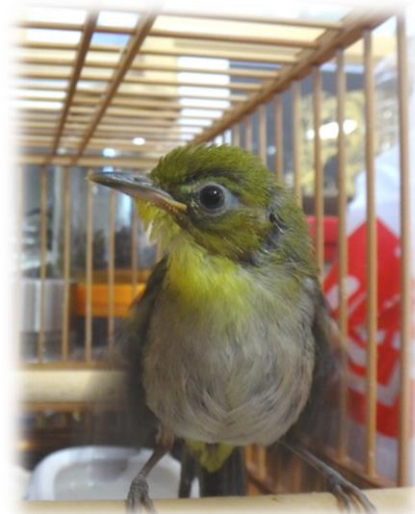


“恩師と教育”

園長 高杉 洋史



運動場で拾われたメジロ

八月下旬に恩師から書籍小包が届きました。九十歳を少し超えられた年齢なのですが、日本獣医史を三十数年かけてまとめられ出版されました。私が大学二年生から修士課程を終えるまでの五年間お世話になった恩師で、当時五十代半ばでした。あのころから三十五年の歳月が流れました。年賀状や暑中見舞ではいつも変わらない筆跡なので、年を重ねたことを意識しないまま過ぎていきました。大学教授を退職された後も、こつこつ古文獻を集められ、調査研究された恩師に比べ、私の三十五年は胸を張って恩師に報告できる年月であったか自信が持てません。こうして学生時代を振り返ると、在学していた五年間の教えがその後の人生に大きく影響していることを実感します。

ここ数年、福岡教育大学の田中教授が主宰されている九州保育研究会の運営をお手伝いしています。毎月末の日曜日は幼稚園教諭、保育士、大学の先生方、そして大学生が玄海ゆりの樹幼稚園に集まり、幼児教育の勉強会をしています。その、特に大学生に教育実習では経験できない体験を用意しています。これなども、三十五年前、恩師はじめたくさんの先生方から得た教育的刺激を、次世代に伝えたいという潜在意識の表れでしょう。受けた教育が数十年の時を経て開花する可能性は、二歳、三歳、四歳、五歳の子どものための教育に携わっている私たちに大きな勇気と希望を与えてくれます。そういえばゼミの後に教授から野鳥の観察に行かないかと提案があり、付属農場の森にシジュウカラやエナガを採

しに行ったことを思い出します。そのとき偶然クロツグミのひなを拾い研究室で育てた経験があります。先日、年中組の男の子がメジロのひなを運動場で見つけ、拾ってきました。巣立ち失敗組のひなです。自然状態ではカラスに食べられる運命です。とりあえずゆで卵の黄身とヒヨコの餌ですり餌風のものを与えてみると食べるので、大人になるか試していると食べるので、拾ってくれた命の恩人は、あくる日もメジロは元気？」と職員室に来てくれます。急な子どもたちのリクエストにも何とか対応できるのも教科書から一歩も二歩も踏み出した教育の成果です。幼稚園の子どもたちが、五年後、十年後、二十年後、三十年後、生物好きな人になってくれたらうれしいです。そして教育者になってくれたらもっと嬉しいです。成果がいつ花開くかわからない教育という仕事は本当に興味深い仕事です。お父様お母様も我が子にとつての親であるとともに最大の教育者です。三歳、四歳くらいの時期のちよつと我慢できる心を育てることが、将来の人格形成に大きな力になることが別冊日経サイエンスに載っています。子どもの能力のほんの少し上の課題に挑戦することが子どもにとつての喜びであり、遊びです。ご家庭の教育力あってこそその幼稚園教育です。まずは大人が心の余裕を持って、かわいい子どもたちを育てましょう。そして子どもたちの未来に期待しています。

